

第七章

勤勉と貴族

失敗に終るにせよ、成功を得るにせよ、
兎に角我運をためし見るべきなり、
之を爲さざる人は我運命を餘りに恐るゝ人事を成す大なる能はざるべし。

主は權柄いさばひある者を位ゐより下くだし卑賤者いやしきものを擧げたり。

モントローズの侯爵

路加傳

貴族勤勉
起る人より

吾人は既に平民にして貧賤より起り、専心勤勉の力に依りて身を立てし
有名なる人々について語る所ありたり。今又吾人は貴族にして等しく有益
なる實例を給する人を擧げん。英國の貴族は、他國の貴族と等しく常に國家
最健の血——英國真正の心腸——に養はれたり。是れ英の貴族が其價值名聲を
保ち得し理由の一なりとす。昔嘶のアンテュースの如く、彼等は其鄉國に觸
れて力を強くし、精神を新にし、勞働の階級より出てたり。而して此勞働の階

級より最古に貴族を出したるなり。

人々の血は皆遠き古の先祖より傳はり來る者、中には祖父の時代より以前は判明せざるもあれとも、人は皆其血統の初を人類の始祖アダムイブに置きて宜し、即ちチエスターフィールド卿は、先祖のアダム——先祖のイヴと記して自らアダム、イブの子孫とせり。一の種族として一定不變のものなし。强者は倒れ、弱者は擧げらる。一の家系衰へて普通人民の中に隱るれば、他の家系之に代る。パーク譯者註、有名なるエドモンド・パークなり、十八世紀英の政治家の著『家系の確證』は各家の勃興及び衰頹を著しく記し、富貴の人の方貧賤の人より大なる不幸に合する由を示せり。パーク吾人に告げて曰く、大憲章譯者註英國の憲法なり、千二百十五年ジョージ王の時、貴族等王に迫りて得たるもの(の)條例を實施するために選はれし二十五人の男爵の家にして、其子孫今貴族院にあるもの一人もなしと、内亂や叛亂は幾多の貴族を亡ぼして其家を散亂せしめたり。然れども其子孫多くは生き残りて今平民の中にあり。フラーは其著『價值ある人々』に於て示して曰く『正しくボーハンス、

モーチマリス、ブランタジエネッツの姓を有する家にして、平民の中に下りたるものあり』と。

かくてパークは説いて曰く『ケントの伯爵の子孫二人、エドワード第一世の子息六人は屠殺者若くは税吏となれり。クラレンスの侯爵の娘マーガレット・ブランタジエネッツの曾孫はシュローブ州ニューボートの補鐵工たり。エドワード第三世の子グロースターの侯爵の子孫の中近頃までハノーヴリー・スクエアのセント・デヨージ寺の寺男たりしものあり』と。英俱蘭土の大宰相にして男爵なりしシモン・デ・モントフォールの子孫は、トウーレー街の馬具工たること解りたり。高慢なるパーシー家の子孫にして、ノースアンバーランドの侯爵たらんことを要求せしものあり、是れダブリンの靴製造人なりき。近頃の事なるが、パースの伯爵の位を要求せしものあり、此者はノースアンバーランドの石炭坑の坑夫なりき。ヒュー・ミラー、エディンバラに於て石工たりし時に使ひし傭人あり。クラウフォードの伯爵領を要求せしもの數多ありしか、此者も其一人なりき、——其要求を確立するために不足なる

者は只一の紛失したる結婚證書なりき。オリバー・クромエル(譯者註、十七世紀英國の大偉人なり、終に統治者となるの曾孫の一人は、スノー・ヒルの雜貨商たり。又クромエルの子孫にして貧に迫りて死せしもあり。恰も樹懶なまけもの譯者註、原名スロース南亞米利加の動物にて其性甚だ懶惰なり)が木の葉を食ひ盡して、其儘幹枝の上に死する如く、堂々たる位階を有する男爵にして總てを食ひ盡して、其家系と稱する幹枝の上に死せしもの數多あり。又艱難に襲はれて之を脱する能はず、遂に赤貧無名に陥りしものあり。爵位や富貴の變化し易きこと誠に斯の如し。

比較的近代の貴族

商人を以て創まり貴族

我英國貴族の多數は寧ろ近代に出來しものなり。爵位を與ふるに、正直なる勳勉をなす人々の中より廣く選びしは、寔に高貴なることと謂ふべし。古昔倫敦の商權は精力強く企業心に富む人の占むるところにして、是等の人々は富を獲て貴爵となる基を開けり。かくの如くにして、コーンワリスの伯爵家はチーフサイドの商人トーマスコーンワリスの建つる所、エセックスの伯爵家は織物商キリアム・ケーベルの建つる所、クレイエンの伯爵家は裁縫商人キリアム・クレイエンの建つる所なり。今のワーキックの伯爵家は國王選定者譯者註 キングメーカーを假にかく譯す。高貴の家にして國王を定むる權利あるものの子孫にあらず。羊毛商人キリアム・グレイザルの末なり。又今のノースアムバールランドの侯爵家の建設者は、バーシー家の人にあらずして、倫敦藥種商ヒュー・スミスン(尊敬する價值ある人なり)と云ふものなり。ダートマウス家の建設者は皮商人、ランドノーア家の建設者は絹製造人、デウシー家の建設者は裁縫商人、ボンフレット家の建設者はカレースの商人なり。又タンカーザル家、ドルマー家、コエントリー家の建設者は呉服商人なり。ロムニー伯爵家、ダッドレー男爵家、ワード男爵家の先祖は鍛冶屋や寶石商なり。デーカー・ス男爵はチャールズ一世の時銀行家たりしこと、恰も今女皇ギクトリアの治政にオヴーストーン男爵が銀行家なるが如し。リッヅ侯爵家の建設者エドワード・オスボーンは倫敦橋ロンドンブリッジの富める織物工人キリアム・ヘットヘットの徒弟なり。ヘットヘットの娘チームス河に陥りたるをエドワードは水を泳ぎて之を救ひ、後遂に之を娶りたり。實業に依りて基を開きた

る貴族の中には尙他にフィッツキリアム、レイ、ピーター、カウバー、ダーンレー、ヒル、カーリングトン等あり。フォーレー家、ノルマンビー家の開祖は、萬事に卓越せる人、其一生は人格の勢力を著しく實際に現はすものとして茲に傳するの値あり。

フォーレー家の建設者リチャード・フォーレーは、チャーレス二世の時、スタブリッジの附近に住みし小農の子なり。此場所は内地鐵器製造の中心地にしてリチャードは鐵器製造の一なる釘製造の職に養成せられたり。當時鐵條を釘製造のため截斷する方法甚だ拙にして、勞力を費すこと徒らに大に、時を失ふこと尠少ならざりき。彼は日々この事を見たり。時に瑞典より釘の輸入せらるゝため、スタブリッジの釘の價低落し、爲に釘製造者等は續々として其業に敗れたり。瑞典人が然く其釘を安價に賣り得るものは、英國人の如く鐵條を釘製造のために截斷するに多大の勞力を費すことなく、器械を以て之を爲すに依るとのこと解りたり。

リチャード・フォーレー之を確めて遂に決心すらく、吾も亦之に倣ひて新方

法を用ひんと。卒然彼はスタブリッジ附近より其身を隠し、爾來數星霜世人はリチャードの所在すら知らざりき。世人のみならず、其家族すらも彼の所在を知らず、是れ彼が其企畫の失敗を怖れて之を人に告げざりしに由れり。彼囊中殆ど無一文なりしも、辛うしてハルに赴き、瑞典の某港に向ふ一船に雇はれて其港に航海しぬ。其所有物としては唯一個の提琴を有するのみ。されは瑞典に上陸して後は、提琴を弾じて人々の哀を求めつゝ、アブサラに近きダンネモラの嶺山にこみたり。フォーレーは音楽に上達し且面白き男なりしかば忽ち鐵製造者等と親しくなるに至れり。彼は工場に入るを許され、其各部に近寄るを得、かくして來れる機會を利用して大に觀察攻究し、鐵截斷の術に近じたり。此目的のため尙滯留せしが、彼は忽ち其姿を深切なる朋友(鐵業家)の中より隠しぬ。——何處へ往きしか一人として知るものなし。

英國に戻りて、フォーレーは、瑞典にて得たる結果をスモーブリッジのナイト氏及び他の一人に傳へたり。二人は深くフォーレーを信任し、鐵截斷の新方法を實行する工場建物を建設するため、必要なる資本金を給たり。然るに

工場建てられて實地に從事するや、器械は動かず、鐵條を截斷せざりき。人々の憤激と失望、殊にリチャード・フォレーの憤激失望や果して如何なりけん、察するに餘りあり。再びフォレーは姿を隠しぬ。人々は思へらく、彼失敗に羞ぢ且惱みて永久に歸ることあらざるべしと。否々、フォレーは鐵截斷術の秘訣を學び、尙此事業をなさんと決心しぬ。彼はまた其提琴を抱いて再び瑞典に向つて出發し、鐵工場に赴きて鑛業家の歡待を受けたり。彼等はフォレーの脱出を怖れて鐵截斷工場の中に彼を滯留せしめたり。フォレーは只提琴を彈ずることの外は何事をも知らざる如く装ひしかば、鑛業家は其伶人（フォレー）が有する目的について毫も察する所なかりき。彼等がかくの如き有様なるに依りて、フォレーは遂に其終生の目的を達するを得たりしなり。彼細心留意工場を調査して、忽ち前の失敗の原因を知れり。畫を描き圖を引くの術は、今日まで知らざる所なりしも、彼は出來るだけの力を盡くして器械の寫生をなし、尙留まりて充分に其是れまで觀察する所を確め、器械排列の有様を明瞭正確に心に留めし後、再び鑛業家の許を去りて、瑞典の一港に

達し、英國行の船に投じぬ。

かくの如く目的を抱いて屈せざるの人、争てか成功せざるべき、人々の喫驚せる中に歸りてフォレーは萬端の準備を成し、結果は全き成功なりき。其熟練と勤勉とに依りて、彼は忽ち大なる財産の基を据え、同時に此邊一帯の地の實業を恢復したり。譯者註、此邊の實業が瑞典製の釘の輸入のため衰へたることは前述せり。彼資を投じてスターブリッヂに一學校を起しぬ。又其子トーマス（キッターミンスター）の大忍人（は、ゼランブ）の時代（譯者註、英國長期議會の終の頃を云ふ）にワースター州長たりしが、オールド・スキンプォードの兒童に自由の教育をなさんため一教育院を建設したり。此教育院は今も尙存せり。古のフォレー家の人々は多く清教徒（ピュリタン）譯者註、英國基督教徒の一派にして、信仰篤く高潔氣清節を貴ぶ、歴史上有名の派なりき。リチャード・バックスター（譯者註、十七世紀英の神學者にして非國教論を唱ふ）はフォレー家の人々と親交ありしものゝ如く、其著『生命と時代』に於て屢々同家の人々について記せり。トーマス・フォレー、郡の長に任ぜられし時、バックス

ターに求むるに、毎月何回とか時を定めて自分に説教せんことを以てせり。バックスター『其生命と時代』に於て曰く、『フォレーと關係せし人々は、皆其著しき誠直純正を賞し、之を疑ふもの一人もなし、以て彼が正義を守りて缺なき人なるを知るべし』と。フォレー家はチャーレス二世の時に華族となれり。

マルグレーヴ(又はノーマンビー)家の開祖キリアム・フィッツ・ブスは其行ふ所リチャード・フォレーと等しく顯著なる一人なり。彼の父は鐵砲鍛冶屋なり。——當時亞米利加に於ける我英國植民地の一部なるメーソンのウールキツチに仕める強健なる英國人なりき。彼は千六百五十一年に生る、其家庭には廿六人の兄弟あり、中廿一人は男兒なり、別に財を有することなく、唯其強固なる心と剛健なる腕とを有せり。キリアムは其血液に丁抹人の海國根性を有せしが如く、早年時代牧羊の業を営みしも、牧人の靜寂なる生活に固着するを欲せざりき。キリアムは天性勇敢にして冒險を好み、水夫となりて世界を横行せんことを願ひたり。彼一船に乗組員たらんと求めたりしも、能はず

して一船大工の徒弟となり、此人について充分船大工の職を學び、餘暇には讀み書きを習ひたり。徒弟の期限終るやポストンに移り、やゝ貨財ある一寡婦に婚を求めて之と結婚し、後自ら造船の小工場を建て、船を造り、之に乗りて海に出て、以て材木業を営みたり。彼殆んど十年間勤勞し辛苦して此業に従ひたり。

一日古きポストン市の曲りたる街を通りたる時、水夫がバハマスの沖にて起りたる難破について語り居るを洩れ聽きたり。是れ一西班牙船の難破したるを以て、船中には巨多の黄金ありと想像せられたり。彼が冒險好きの心は忽ち燃えたちぬ、一刻の猶豫もなく、適當なる乗組員を集めてバハマスに向ッて帆を揚げたり。破船は正しく岸にありて容易に之を見出し、積荷の大部分を獲たれども、金子は甚だ少かりき。されは其結果は辛うじて費用を支出し得たりしのみ。さりながら、彼の成功は能く其冒險心を盛にしぬ。ポト・デ・フブラタ附近に積載する所遙に多かりし船の、半世紀以上も前に難破したるものあるを聞き、彼は直に船を引揚げんとす。——少くとも財寶だけな

りとも釣り揚げんとの——志を起しぬ。

さはれ、餘りに貧しくして、多大の幫助を得ずしては斯かる企畫をなす能はざりしかば、幫助を得べしとの希望を以て英國に航行せり。バハマスの中、既に英人の知る所となれり。彼は直接に政府に願ひ出てぬ、彼の切なる熱望は、官人普通の惰氣を打ち破りてチャールズ二世は「ロス・アル・デ・エアー」と稱する船を其自由に用ひしめぬ。此船は砲十八門、乗組員九十五人ありて王はキリアムを首長とせり。

キリアム・フィッブスは是に於て西班牙の船を見出して財寶を引き揚げんとて帆をあげたり。彼は事なくしてヒスパニオラの海岸に達しぬ。されども如何にして沈める船を發見せんかは大なる困難なりき。難破の起りしや實に五十年以上の昔にあり、而してフィッブスは只、此事の傳説を基として事を行はんとす。探検すべき海濱は甚だ廣し其海洋は茫漠として際なし、其何處かに大船は沈みしならん、海の表面には何等の痕跡のあるなし。然り

と雖も、彼は心鐵の如く、希望満々たり。水夫に海岸に沿ひ歩みて仕事をなさしめたり。幾週もの間、水夫等は海草を採り、小石、岩の缺片等を拾へり。水夫にとりて何處にか之より物倦き仕事あらん、彼等は互に不平を言ひ始め、首長なるフィッブスは、自分等を馬鹿物の使に連れ來りしものなりとせり。

遂に不平黨は勢力を得、水夫は公然反逆を試みたり。彼等の一群は、一日後甲板に突進し、航海を止むべしと要求せり。さりながら、フィッブスは之に恐るゝ人にあらず、直に首魁等を捕へて他は其職務に復せしめたり。修繕のため一小島に近く錨を投ずる必要あり、船を軽くせんため積荷の大部を陸揚げしたり。不平は尙乗組員の中に増しつゝあり。陸上に居る者の中に陰謀起りぬ、曰く船を捕獲し、フィッブスを船外に投じ、南海に巡航して西班牙人に對して海賊を働かんと。されど、船大工主任の働きを要せしかば、密に此事を之に計れり。然るに此大工忠實にして直に船長フィッブスに其危険を告げたり。忠實なる人々を周圍に召集し、フィッブスは砲に裝填して之を海岸に向け、船と海岸とを通ずる橋を取り去らんことを命じたり。反逆者等其身を現

はすや、船長は之に聲をかけ、貨物尙陸上にあるに近よらば發砲すべしと告げ、是に於て彼等は退き、フィッブスは大砲の掩護の下に無事に貨物を再び搭載したり。反逆者等は此荒れはてゝ食物とてはなき島に残されんことを恐れて、手を上げて、職務に復せんことを願へり。フィッブス之を許し、後に禍害の世らんも知れねば、之がため適當なる戒心をなせり。されどもフィッブスは第一に機會を得て乗込員の中の反逆者を上陸せしめ、他の者を其代りに用ひたり。されど再び盛に探檢に従ひ得るに至りし頃、船を修繕するため、是非とも英國に歸るべき必要あるを知れり。され、彼は西班牙船の沈みたる場所について、前よりも精確なる報知を得、未だ明かならずと雖も、其企畫の終に成就すべきことを前よりも確く信じたり。

倫敦に歸りてフィッブスは航海の結果を海軍局に致したるに、海軍省は彼が努力を盡ぶ旨を言明したり。されど、フィッブスは不成功にして海軍省は更に王所屬の一艘を彼に託せんとせざりき。時にジェームス第二世位にあり、政府は財政困難に遭遇し、爲にフィッブス其黄金獲得の目的を訴ふ

るも其甲斐なかりき。フィッブス依て一般公衆の寄附を集めて入用の費を得んと試みたり。最初是人皆之を笑ひぬ。されど彼の不撓なる要請は遂に勝を制して、四年の間——其間彼は赤貧の中に暮せり——其計畫を勢力ある人々の耳に吹き込みし後、彼は遂に成功したり。二十株より成る一結社組織せられたり。モンク將軍の子なるアルベルマールの侯爵、主として之に關係し、計畫實行に要する費用の大部を出したり。

フォレーと等しく、フィッブス第二の航海は第一よりも幸となれり。船は無事にポート・デ・ラ・プラタに達しぬ。暗礁脈の附近に彼の船難破の場所ありと想像せられたり。第一の事業は八挺又は十挺の櫂を保ち得る一端艇ブートを造ることなりき。フィッブスは之を造るため自ら手斧を揮ひたり。又傳へて曰く、彼は海底を探檢せんため、潜水鐘に似たる一器具を造りたりとかゝる器具のことは、書物に記しある由わかりたり。されどフィッブスは書物に關する知識殆ど無し。されば之を自ら發明して自己の用に用ひたりと云うて差支なかるべし。彼は又印度人の潜水者を雇ひたり。彼等が眞珠を取るため潜

水すること、其海底に於ける働きは著しきものなり。附屬船なる端艇デブトは、暗礁脈に近つき、人々は仕事にかゝり、潜水鐘を沈めたり。海底を探り歩む種々の方式を、幾週間も絶えず用ひたり、されど成功の見込毫もあらざりき。然れどもフィッブスは望むべからざるに望みて勇ましく續けぬ。

遂に一口、一水夫端艇デブトの傍より清澄なる水中を覗き見て、奇妙なる海中植物の岩の罅隙とも思はるゝ所より生じ居るを見たり。依て印度人の潜水夫を呼びて之を探り來らしむ。潜水夫は此海藻を探り來りしが告げて曰く、若干の船中用砲ありたりと、最初此報告は信すべからざるものとせられたり、されど尙進んで調査するに及び、其正確なることわかりたり。探索は起りぬ、而して忽ち一潜水夫は腕に堅き銀の棒を抱いて上り來れり。フィッブス之を看て叫ぶらく『上帝に感謝すべきかな！我等は皆人となりたり』と、潜水夫も潜水鐘も同じき一目的を以て勞作に従ひ、數日にして約三十萬磅の財寶引き揚げられ、之を抱いてフィッブスは英國に向つて帆を揚げたり。フィッブス英國に着するや、臣下のもの王に強ひて曰く『フィッブスが王の允許を

願ひし時、其事業について正確に告ぐる所なかりきとのことを口實として、其貨物を載せたるまゝ船を差押へよ』と、されど王は答ふるに、フィッブスの誠直なることを知れること縦ひ彼が今の二倍の財寶を持ち歸るとも彼と友人との間に全財寶を分つべきことを以てせり。フィッブスの得る所約二萬磅なりき、而して王は精力と正直とを以て其企畫を行ひしを賞して、彼を勳爵士エムライネン譯者註、英國華族の最下位となしたり。彼はまた新英國の知事となり、此職に在る間はホート・ロイヤルやケエベックに對する遠征に依りて佛蘭西に對して母國譯者註、英國のこと及び植民人のため勇ましき働をなしたり。彼は、マサチューセッツ州の知事を勤め次に英國に歸り、千六百九十五年倫敦にて歿しぬ。

フィッブスは、後年其下層より出でしことを言ひて毫も羞づる色なく、其並の船大工より起りて勳爵士となり、一川の知事となりしことは、彼の正しき誇りなりき。公務にて忙殺せらるゝときは、彼は屢々再び船大工とならん方樂ウツクなりと言へり。彼が死後に遺せしもの、忠信、誠直、愛國、勇敢の品性なり。是

れノルマンビー家(譯者註、フィッブスの後をノルマンビー家と云ふこと前にあり)の貴き遺産なること疑ふべくもあらぬなり。

ランスドーン家の開祖キリアム・ベッティーも、亦等しく精力ある人にして當時に有用の人なりき。彼はハンプ州ロムセイの貧しき織工の子にして、此處に千六百二十三年に生る。小兒の時、其郷里なる市街の一文法學校にて可成の教育を受け、後ノルマンデイのケーン大學に學ばんと決心せり。ケーンにあるや、父の幫助なくして自己を支へ、僅かの商品を持ちて小行商人の如きものを營めり。英俱蘭土に歸りて一船長の徒弟となる。船長はベッティーの視力惡しき故を以て、綱の先を以て彼を扶つて常とせり。彼嫌ひて此處を去り、醫學の研究を始めた。巴里に在るや解剖に従事し居りしが、其間ホッブス(譯者註、英國有名の哲學者なり、十七世紀の人)の著作し居たる『視學論』のために圖表を書きたり。彼は非常なる貧窮に迫りて二三週間全く胡桃のみを食ひて生活せしことすらあり。されども再び小商賣を始めて、正直に之を營み暫時にして衣囊は金を抱いて英國に歸るを得たり。

彼器械に關する技能巧みにして寫字器械を發明して、之か專賣特許を得居れり。彼は藝術や科學に關して文を草し、又化學や醫學の實驗に成功して、其名聲忽ちにして著しく揚がれり。科學者等と交はりて、科學實行のため一協會を起さんとの計畫をなし、(此會は今の學士會院の發芽なり)第一の集會は彼の宿所に於て開かれたり。オックスフォールドにて、彼は解剖について大名ある解剖學教授の代理を暫く勤めたり。千六百五十二年愛爾蘭土の軍隊の軍醫に任ぜられたり。彼の勤勉が報ひられたるものと謂ふべし。依て彼は其地に到れり。世襲州知事ラムベルト、フリートウッド、ヘンリー・クロムエル(相繼いで職につきしなり)の侍醫たりき。沒收したる廣き土地が清教徒の軍人に與へられしが、ベッティーは土地の測り方不正確なるを見て、其業務多くある中にも自ら此事に當らんと企てぬ。彼の任務甚だ多く且多く金を得べき地位にありしかば、之を妬むものに賄賂を取りたりと批難せられ、是等の職を罷められたり。されども王朝恢復譯者註、原語ゼ、レストレーションなり、千六百六十年チャーレス二世歸りて王政恢復さる)の時また用ひらるゝ

に至りたり。

ペッティーが倦まず撓まず工藝上の考案、發明、創造をなせしこと世にも稀なり。其發明の一に風波に逆つて帆走る二重底の船あり。彼は染色法、水理、羅紗製造、政治、數學等其他種々の問題に關する論文を公にせり。彼は鐵工場を創設し、鉛坑を開き、ビルチャード(譯者註、英國に産す青魚なり)漁業及び材木商業を始めた。而して是等劇務の中に學士會院の討論會にたづさはりて、此會のため大に貢獻せり。ペッティー其豊かなる資産を此子息等に譲りしが、其中の長男は、シエルバーンの男爵に叙せられたり。彼の遺言狀は奇異なる證書にして、誠に能く彼の性格を示せり。即ち其生涯に起りし重なる出來事を詳に記載し、又其財産の漸次に増せしことを記せり。

貧民に對する彼の感情は特異なり。其言に曰く『貧民に金を贈ることは余の躊躇する所、自ら選んで乞食となり、之を職とするものには余は一物をも與へず。天災のために不具となりしものは、社會公衆が之を庇保すべし。手に一の職業なく、一の財産なきものは、親戚之を顧みるしべし。』故に、余は我親

戚の中の貧なるものを總て補助し、多數に麵包を得るの道を與へて安んぜり。又公事に働き、發明をなして仁惠の實際を求めたり。而して余の恩惠に與かるものには、險を冒しても人に恩惠を怠るべからざる由を勧めたり。然れども風習に従ひ、又確かなる道を取るため教會區(此教會區にて余は死するなり)最貧の民に二十磅を與へたり』と。彼はロムセイの壯麗なる古きノルマンの寺院に埋葬せられたり。——此町は彼が貧人の子として生れたる所なり。——唱歌堂の南側に今も猶一墓石を見るべし。碑銘は不文なる一工人の刻する所、曰く『茲にサー・ウィリアム・ペッティー横へると(譯者註、碑銘の原文は、"Here Lyes Sir William Petty"とあり、Laysは他動詞にして横へるとか置くとかの意にして誤れり、之にはliesを用ひざるべからず、liesは横はるの意なり、スマイルズ氏が不文なる一工人と云ひしはこれに依りてなり)』

現時勤勉と事業とに依り華族となりたる家にペルバーのストラット家あり。千七百五十八年ジェデティア・ストラットが初めて貴爵に任ぜられて此家を開きしなり。是れ彼が肋骨形に編める靴下を造る機械を發明せしに依りて得

たるものにして、是に依りて彼は富の基を造りたりしが、子孫相繼いで此富を増し、又高尚に使用したり。ジエデディアの父は農夫にして、麥いね・製つく造を兼ね、子供のために教育をなすこと極めて僅少なりしが、子供は皆よく榮えたり。ジエデディアは次男にして、少年の時は田圃の仕事に父を助けたり。夙に器械に關する傾向をあらはし、當時の粗糲なる農具の中に五六の改良を施したり。其叔父死するに及びてノルマントンに近きブラックハールの一田圃を繼ぎぬ。此田圃は長く同家よりの借地なりしなり。後少時にしてストラットはダービーの股引商人の娘フォーラット嬢を娶りたり。妻の兄弟より、肋骨狀靴下の製造の種々の企をなすものありしも不成功なる由を聞き、他人の成就し得ざりしものを自ら成し遂げんと志して此事の研究を始めた。依て彼は一靴下編織器械を得て其構造と動く有様とを學び、新組織をなさんと進みぬ。かくして彼は首尾よく器械の普通の孔裝置に一變更をなし、肋骨狀の靴下を造るを得たり。此改良器械の專賣特許狀を得て、ダービーに移り、大規模に肋骨狀靴下の製造を始め、大に之に成功せり。後彼はアークライト(譯者註、第二章

に出づ)と合同せしが、アークライトの發明の功を自ら充分に用ひたり。又特許狀を得、ダービー州ランフォルドに一大木綿工場を建設する方法を見出せり。アークライトと合同の期限終るや、ストラット家の人々ペルバーに近きミルフォールドに一大木綿工場を起し、時の家族の長(譯者註、ジエデディア・ストラットを指す)の名を取りて此工場の名となせり。

ストラット家の建設者ジエデディア・ストラットの子等も亦器械上の才能に富めり。長子のキリアム・ストラットは自動紡績機を發明したりと傳へらる。只當時器械上の熟練が、之を製造するに足らざりしたため、其成功沮みたり。キリアムの子エドワード、亦卓越せる器械上の天才にして、早年にして馬車の釣車の原理を發見したり。彼は此原理に従ひて孤輪貨車一個、二輪馬車二個を造り、之をペルバーに近き自己の田圃にて用ひたり。尙ストラット家の人々は、其勤勉と熟練とにて獲たる富を高尚に使用したるを以て名高く、其雇用する勞働者の道德を改善し、社會的狀態を改善せんと種々に力を盡くし、又善事業のために富んで金を寄附したり。——ジョセフ・ストラット氏がダービーの彼

の美しき公園(又は樹木園)を市民へ永久の贈物として寄附したるは、只此家が爲したる幾多善事業中の一例に過ぎざるのみ。ジョセフ・ストラット氏が此貴き贈物を寄附する時になしたる短き演説の結語は、引用又記憶せらるゝ價值あり、曰く『太陽は我生涯中耀々として我が上に照したるを以て、余と共に生活し、又勤勞に依りて余が蓄財を助けたる人々の幸福を増さんために、財産の一部を費さん、之を爲さざるは恩知らずと謂ふべきならん』と。

現時に於て又古に於て、海上に陸上に勇敢なる働をなして貴爵を得たる勇者數多し。是等の人々の頭はせし勤勉と精力とは決して上述の人々に劣らず。軍功に依りて貴爵となり、國家危急存亡の場合に、屢々英國軍隊の先頭を導きし古昔封建諸侯の名は暫く掲げずとするも、吾人は拔群の功に依りて位を得たる所のネルソン、セント・ペンセント、リオンス、ウェリントン、ヒル・ハーディング、クライド及び近代に於て幾多の人を挙げ得べし。然りと雖も法律の職に従ひて公正に之を勤め、孜孜として勤勉せし者は、遙に他に勝りて多く貴爵に陞れり。七十より少からざる英國貴族(中に二の候爵あり)は法律家に依

りて建てられたり。マンズフィールド及びエルスキンは其家系の高かりしことは實なり。されどエルスキンは其家未だ曾て貴族を出さざりしを神に謝するを常としき。他の華族は多く辯護士、雜貨商、僧侶、商人及び中等社會の勤勞者の子なり。法律家より華族となりしもの、バワード家、カエンディッシュ家あり、此兩家最初の貴族は共に判事なりき。アイレスフォールド家、エレンボロウ家、ギルドフォールド家、シャフツベリー家、ハードキック家、カーディガン家、クラレンドン家、カムデン家、エルスメア家、ロスリン家等亦然り。又近代に於てテンターデン家、エルドン家、ブロウガム家、デンマン家、トルーロ家、リンドハースト家、セント・レオナルズ家、克蘭ワース家、カムベル家、チェルムスフォード家等亦法律家より貴族となりしものなり。

マンズフィールドは實にして勢力なき其華族の親戚には一の貧ふところなかりき。彼の成功は之を得んとして精勵用ひたる方法の正當なる結果として生ぜしものなり。小兒の時小馬に乗りて蘇格蘭土より倫敦に赴けり、——此旅行は二ヶ月を要したり。専門の學校を卒業して後法律の職を執り、遂に進みて英國の高等法院長となり、以て堅忍不倦なる其勤勞の生涯を終へたり。——此職を彼は世に稀なる才幹と公正と名譽とを以て勤めしこと、世人一般の認むる所なり。

リンドハースト卿の父は肖像畫家たり。セント・レオナルドの父はバーリントン街の香料商兼理髮師なり。若きエドワード・サッジデンは、もとカゼンディッ・スキューアのヘンリー・タ街に公證人たりし故グルーム氏の事務所に使走りの小僧たりき。後の愛爾蘭土法官長譯者註、サッジデンは後愛爾蘭土法官長となりたるなりが、初めて法律の觀念を得たるは此處に於てなりき。故テンターデン卿は、多分最下層より出てたるならん。彼は下層より出てたることを耻とせざりき。そは彼は其高地位を得る方法として用ひし勤勉、研學及び專心が、全く己に頼ることを感じければなり。或る時テンターデン卿、其子チャーレスを携へて、時にカンターバリー寺院の西正面の向側に建てりし一小屋に到り、指し示してかく語りしと云ふ「チャーレスよ、此處に一小屋あり、余は御身に之を示さんため、今日此處に來りしなり。此店にて御身の祖父が、理髮料一片にて理髮の業を営めり、余は此事を回想して最も誇るものなり」と。少年の時、テンターデン卿は、右のカンターバリー寺院の唱歌者なりき。其生涯の目的が、失望の爲めに變化したるは誠に奇なる場合なりき。

彼ジャスチース・リチャーズ氏と職業巡回をなし居りし際、カンターバリー寺院に勤むるために赴けり。リチャーズが共に歌ひし一人の聲を褒むるや、テンターデン卿は曰へり「吁、余の今日まで其聲を羨みしもの只此人のみ。此市の學校に居りし時、余と彼とは合奏者の候補者となりしが、彼遂に之を得たりき」と。

粗豪なるケンヨン及び強健なるエレンボローが同じく高等法院長と云ふ顯職に陞りたるも、亦同様に著しかりき。又フアイ、フ州に一教會牧師の子にして英、蘭土の前法官長たりし彼の聰明なるカムベル卿近頃高等法院長となりしも亦右に劣らざる人なり。多年の間、彼は新聞の通信員として辛勞せり。而して其間職業の準備に熱心研究し居たり。彼尙早年なる時、巡回裁判には町より町に徒歩旅行するを常とせり。是れ貧にして傳馬にて旅行する程の財なかりしに由る。卓絶と名聲とは法律の業に於ても、何れの業に於ても、精を盡くし心を氣高くして追求する勤勉の人に生じ來るもの、彼また一步又一步、靜かに而も確かに、此卓越と名聲とを得るに達せり。

右と著しき精力を以て、名譽の險路を辿りて等しく成功して法官長となりし人々の著しき例、他にもこれあり。故エルドン卿の生涯の如き、思ふに其最も著しき例の一ならんか。エルドン卿はニューカッスル石炭工の子なり、少年の時學を好まずして惡戯に耽り、學校に在りては非常なる惡童にして常に鞭たれたり。――未來の法官長は果樹園を盜むことを以て其樂しき事となしたるなり。父は最初彼を雜貨商の徒弟となさんとせしが、後には己と等しく石炭工の職に養成せんと略ぼ決定せり。然るに時に恰も長子オリアム後のストーリーエル卿書を父に贈りて曰く『ジャックを我許に送り給へ、余は彼のため良くなし得』と。これに依りてジョン譯者註、エルドン卿は其名をジョン・スコットと云ふは、オックスフォードに送られしが、此處にて兄の感化と自己の精勵とに依りて特待研究生譯者註、上巻にも出てたり Follow を假に譯せしもの、卒業生の俊秀なるものに學校より學費を給して研究せしむるなり。日本の某私立大學に於て此制度を採用して特待研究生の名を附す。依て余は之を借用せしなりとなるを得たり。然るに休暇にして郷里に歸省せ

る時、彼は不幸にも――結果より之を見れば、幸福にも』と云ふ方正しからんか――一少女と相戀ふるに至り、手を携へて英俱蘭土の國境を超えて蘇格蘭土に走り、茲に結婚したりしが、誠に友人の思ひしが如く、茲に窮乏に瀕するに至りたり。結婚したる時、彼住むべきの家すらなく、又未だ一片をも得ざりき。彼は特待研究生の特權を失ひ、又教會にて昇進することに定まり居りしも能はずなれり。是に於てか彼は法律の研究に心を向くるに至りぬ。一友に書を送りて曰く『余は粗暴にも結婚しぬ、されど自分の愛する婦人を養ふため、辛苦勉勵せんこと、是れ余が決心なり』と。

ジョン・スコット譯者註、エルドン卿の名は倫敦に來り、カーシター街に一小屋を結び、此處に住みて法律の研究をなせり。朝は四時に起き、夜は眠氣を防がんため濡手拭を頭の周圍に捲きて遅くまで勉學し、大決心と大精勵とを以て研究しぬ。辯護士の許にありて勉學せんことは貧困にして能はざりしかば、先決例を集めし寫本より三冊を寫出せり。春花秋風茲に幾歲、後彼法官長となりし時、一日カーシター街を過ぎりて秘書官に語るらく『此處に余

が第一の棲木あり、余は幾度も余が手に六片^{ヘン}を持ちて、夕食のため小鱈を求めんため、此街を下りたるを憶ひ起す」と。これは後年の事なるが、法律研究の結果遂に辯護士となりしも、長き間依頼者もなく、門前雀羅を張るの有様なりき。其第一年目の収入僅かに九志^{シルシグ}なりき。四年間彼精勵して倫敦裁判所に^シ出で、南部巡回裁判に加はりしが、依然として其業少しも振はざりき。其郷里の町に於てすら、其辯護せし處多くは貧乏人のためのみなりき。其職業の景氣の誠に思はしからざるや、倫敦に門戸を張るを止めて、田舎の辯護士たらんと殆ど決心せし程なりき。兄のキリアムは家郷に書を送りて曰く『憐れなるジャックの業を、營むやまことに拙なり、實に誠に拙なるよ、』と、さりながら彼が雜貨商たり、石炭工たり、田舎牧師たることを免れしが如く、又田舎法律家たるを免れたり。

遂に一機會は來りぬ。此機會に依りてジョン・スコットは勤勉勞苦して得たる法律上の博覽なる知識を顯はすを得たり。彼の囑託せられたる一事件に於て、訴訟代理人及び依頼者の希望に反對して一の點を遂及する所あり。

たり。公共記録局長は彼に反對して判決したれども、彼は更に貴族院に訴へたるに、サー・ロー卿はスコットの論及したる點を其意見の通りに更へたり。此日貴族院を去る時、一辯護士スコットの肩を叩いて曰く『青年よ、御身麵包と牛酪^{ブガ}を得んこと一生確かななり』と。此豫言は事實となりき。マンズフィールド卿は一年間全く収入なかりしことあり三千磅^{ヤン}の収入ありしことあれども、其中間の収入を得しことなしと云ふを常とせり。而して我ジョン・スコットも亦正に同事を語り得べし、誠や彼は彼の進捗甚だ急速にして、千七百八十八年僅かに三十二歳にして國王の顧問官に任ぜられ、南部巡回裁判の長となり、エオブレーの選舉區より代議士に選舉せられたり。洵に彼は其初めの遲鈍なる而も不退轉なる苦業を以て、終りの成功の基を据えたるなり。彼は熱心修養したる堅忍と知識と才能とを以て我情心を鼓するの刺馬輪^{スプー}となしぬ。彼は漸次にソリスター、アットーニー・ジェネラル^ト（譯者註、共に法官の職名）に任ぜられ、遂に英俱蘭土の法官長となりぬ。此職は國王の與へ得る最高の官にして、彼は二十五年の間此職を保ちたり。

ヘンリー・ビッカーステースは、エストモアランドのキルキバイ・ロンス
デールの一外科醫の子にして、父と同職業に養成せられたり。エディンバラ
に於て學生たる際、正確に勞作し、専心を以て醫學の研究を勉め、學業衆を超
えたり。キルキバイ・ロンスデールに歸りて父の業を助けたりしが、毫も此職
を好まずして、田舎の退隱的なるに不満を抱きたり。然りと雖も、彼は絶えず
其身を修養しつゝ進み、生理學の高等なる方面に思索考究を凝らしぬ。父は
ビッカーステースの希望を納れて、之をケンブリッジに送ることに同意せ
り。彼は此處にて學位を得んと欲したるなり。そは首府にて醫業を開かんと
の志望ありしに依る。されども學事に餘り刻苦せしため健康を損じ、之を恢
復せんと目的を以てオックスフォード卿の醫師として之に従ひて海
外に漫遊する任を受けたり。

海外に在るの時、伊太利語を研究して大に伊太利文學通を以て稱せられ
たり。されど醫學を好まざること依然として異なるなし。嘗に之を好まざる
のみかは、之を罷めんと決したり。されどケンブリッジに歸りて醫學の學位を

得たり。彼が刻苦黽勉せしこと、此學年に級の首席を占めしを以て知るべし。
軍隊に入らんとして能はず、更に法律家を志し、インナー・テンブル(譯者註、思
ふに法律學校の名なるべし)の生徒となれり。彼は醫學の研究に刻苦精勵せ
しが如く、法律に於ても大に勉めぬ。父に書面を贈りて曰く「誰人も見に告げ
て、御身終には成功すること確かなり——只堅忍なれ」と云ふ。而して見は如何
にして成功の來るやを知らずと雖も、見は出來るだけ之を信ぜんと欲す。又
見は何事にて自己の力にて成功せん決心なり」と。

廿八歳にして辯護士となりぬ。されど之より進歩の階段は自ら攀ぢざる
べからず。時に猶貧にして友人の贖金を以て生活せり。多年の間彼は勉學し
つゝ待ちたりき。されど猶一の依頼者なし。彼は補養を減じ、衣服の費を減し、
生活の必要品すら制限して、萬事萬端不撓の意氣を以て努力邁進しぬ。家に
書を送りて心中を吐露して、曰く「余は自己を確立する善機會を得るまで、如
何にして閃き進み得べきかを知らず」と。三年間待つも尙一の依頼者なし。乃
ち友人に書を送りて「長く諸君の御厄介になるよりは寧ろ喜んで此業を棄

てケンブリッヂに歸らん、此處に歸らば自分の生計を營み、多少の利益を得ること確かなり」と、郷里の友人少額の金を醸して送り來り、之を以て尙彼は支へたり、依頼者は漸次に來りぬ。小事件にて確く振舞ひしたため、漸次大事件を依頼せらるゝに至りぬ。彼は決して機會を失はざるの人、又改善の正しき場合を逃す人にあらず。其不退轉の勤勉は功を奏して幸運を産むに至りぬ。尙二三年を経て彼は管に家より補助を要せざるに至りしのみならず、其負債に利子を添へて返却するを得ることゝなれり。陰雲今は跡を收めぬ、其後のヘンリー・ビッカーステースの生涯は、名聲と利益と大名との生涯なりき、彼公共記録局長となり又ラングデル男爵として上院にありしが、遂に歿しぬ。彼の生涯は、個人の品性を高め其勤勉に冠するに大成功を以てするに於て、忍耐堅忍、良心的活動の、如何に力あるかを證するものなり。

かくの如きは卓絶せる人々の中の二三を示すものなり。彼等は氣高く、其道を進みて高位に至り、其職業より最多の報酬を得たるもの、彼等は普通一般の性格を有するものなりしが、専心勤勉の力に依りて之に力を養ひ、之

を精勵活用して此報酬を得たるなり。